

(4) 果樹の大型カメムシ類

令和7年6月下旬以降、道央地域や道南地域の醸造用ぶどう園地において、チャバネアオカメムシやブチヒゲカメムシ等の大型カメムシ類が多発した。また、おうとうやりんごではクサギカメムシによる吸汁が発生した。本道での大型カメムシ類によるぶどうへの加害は令和5年8月中旬に初めて確認されたが、令和7年の発生は令和5年より1～2カ月早かった。チャバネアオカメムシは、本州では成虫越冬して寄主を変えながら年1～3回発生する。道内における発生生態は不明な点が多いが、通常は年1回の発生と考えられ、加害作物は、りんご、ぶどう、おうとうの果実等が確認されている。一方、ブチヒゲカメムシは成虫越冬して年1～2回発生すると考えられている。いずれも令和7年の多発は、前年までの越冬量が多かったことに加え夏季の高温により発生が早まり、個体数が増加したと考えられる。令和7年の越冬量も同様に多いことが予想されるため、令和8年度の発生に注意が必要である。

防除に当たっては、山林からの果樹カメムシ類の飛来数は地域による差が大きいため、園地への飛来状況をよく観察する。特に、山間部や山林に隣接する園地では注意する。成虫が次々に飛来して果実被害が懸念される場合には、カメムシ類に登録のある薬剤で直ちに防除を実施する。天敵類にも影響を及ぼすピレスロイド系剤（IRACコード：3A）を散布した後は、ハダニ類やカイガラムシ類が増加することがあるので、これらの発生にも注意する。有袋栽培は吸汁被害を抑制する効果があるため、袋かけは遅れないように実施する。また、果実の肥大によって袋に果実が密着すると袋の上から吸汁されることがあるので、果実と袋の大きさのバランスに留意する。



写真 左:ブチヒゲカメムシ成虫、右:チャバネアオカメムシ(道総研 原図)